

「おでん」の味とやさしさ

栗田陽二郎（福岡県福岡市）

世界の人々が、「東京オリンピック」（一九六四年）を「奇跡」と呼んだ。敗戦後二十年で高度経済成長を遂げ、世界の耳目を一点に集めた。東名高速道路を完成させ、超特急新幹線を走らせ、立派な競技場を次々と造り、人々を熱狂させた。

その年、二十二歳の学生だった私は、修行僧の見習いをしていたこともあって、オリンピックとは無縁な生活を送っていた。しかし、その間、思ってもみない「絶品グルメ」に遭遇する。「クリスマス・ヴィレッジ」（以下、XVと記す）での体験だ。

XVは、当時は、「財団法人上智厚生事業団」が運営する「バタ屋部落」（現在は、放送禁止用語）であった。それは、高層ビルの陰に隠れて、廃品回収を生業とする貧しい人々の集落だった。ベニヤ板やトタン張りの、小屋同然の家々が立ち並ぶ。そこに、大勢の家族がひしめき合って住んでいた。小さな商店や、彼らだけの学校も隣接していた。集落の一角に、XVの倉庫兼事務

所があった。そこには、米軍基地から届けられた衣料品や電気器具、電線などがうす高く積まれていた。その他、寄贈された様々な日用品なども品目ごとに整理され、保管されていた。

私に託された仕事は、分類された品々を、各家々に届けたり、子どもの遊び相手をしたりすることだった。日中、男性は朝から焼酎瓶を片手に煙草をくゆらせ、将棋や花札に興じている。女性は、家の中で内職でもしているのか、ほとんど姿が見られない。ところが、夜のとばりが降りるにつれて、集落はにわかに活気づく。あちらこちらで荷車を用意し、廃品回収に出かけるのだ。

彼らの生活に溶け込み、理解を深めるには、一緒に荷車を引くに限る。そう決意してボスのKさんに頼んでみた。

「おめえさんたちの、するこっちゃねえ」

ひと言で一蹴されたが、再度頼む。

「やつと友達になれたじゃないですか。お願いです。一緒に車を引かせてください！」

「よし、わかった。今夜十時に出発だ」

その日は、大寒。凍えるような冷たい風が頬に痛い。見上げると、満天の星々だ。

荷車は、想像以上に大きく、山車を彷彿させる。Kさんが車を引き、奥様が後ろから押す。犬二匹も引き役だ。

日中は、酔いどれ、遊びほうけているKさんだが、いざ、廃品の在り処を見つけると、目が血走り、一気に走り出し、すばやく手にして荷車に放り込む。まさに、早業である。

段ボール、衣類、電線、食品（レストランの食べ残しが多かった）など、それらがどこにあるかを、熟知している。荷台はみるみる増え、重さも半端ではない。特に上り坂は、大変だった。犬も首を精一杯のぼして、引っ張っている。

足立区西新井町を出発して約五時間。朝の三時を回るころには荷台も満杯になっていた。

「もう、よかろう。少し、休もうか」

Kさんのひと言で道路に座り込むと、急に空腹感に襲われた。この間、水一滴飲んでいなければ、何も口

に入れていなかった。慣れない仕事に対する緊張感もあったのか、足腰に痛みが走る。犬も舌を出して、ハアハア一息をしている。奥様は、タオルで汗を拭いている。ところが、Kさんの姿が見えない。

「おい、これを、食え」

急な声に見上げると、目の前に、小鉢に入った「おでん」があった。湯けむりのたつ、ほかほかの「ゆで卵」と「ジャガイモ」。

彼は多くを持てる中からではなく、少しの中から多くを差し出してくれた。そうしたKさんのあふれる愛が、言葉で言い表せないほどの絶妙な味と香りを醸し出していた。胸が熱くなった。

空腹感が満たされたというよりは、本物の人のやさしさに触れた喜び体験だった。

「今夜はな、あなたのおかげで、ふだんの二倍だ。ありがとうがとな」

三人並んで「おでん」に舌鼓を打つ。お腹も満たされ、やさしさに心も癒されて、再出発。XVに戻ると、しらしらと夜が明けようとしていた。

絶妙な「おでんの味」と、「人のやさしさの味」という、ふたつの宝物をいただいた、五十三年前の体験である。